

津博

TSUHAKE

2023.2 No.115

トピックス

- ミニ企画展「お正月ー幸せを招く福の神ー」
- ミニ企画展「茅葺き職人山本進さんの仕事」
- 第126回文化財めぐり
- 江戸一目図屏風レプリカ移設

資料紹介

- 考古資料この一点⑥
ー勝央町念仏塚出土の銅鐸ー
小郷 利幸

お知らせ

- 企画展「郷土の刀剣Ⅱ」開催



津山郷土博物館

Tsuyama City Museum

ミニ企画展 「お正月ー幸せを招く福の神ー」 を開催しました

12月24日～令和5年1月15日まで、ミニ企画展「お正月ー幸せを招く福の神ー」を開催しました。津山藩のお抱え絵師が描いた大黒図や寿老人図を中心に、令和5年の干支であるうさぎの絵などを展示しました。



展示風景

ミニ企画展 「茅葺き職人山本進さんの仕事」 を開催しました

やまもとすすむ

山本進さんは、津山市出身の茅葺き職人で、少なくなった茅葺き屋根の伝統技術を継承した、県内でも数少ない職人の一人でした。

津山市の沼弥生住居跡復元住居や高床倉庫の茅葺き屋根を担当し、県内外をはじめ、米国の日本庭園の茶室の屋根も担当するなど国内外で活躍されていました。また、茅葺きの伝統技術を伝えるため、各地の茅葺き建物のミニチュア模型も多数作成され、茅葺き見学会を開催するなど普及活動にもご尽力されていましたが、令和3年お亡くなりになりました。

本展示では、茅葺き道具や作業風景の写真、各地のミニチュア模型などを通して、茅葺き職人山本進さんが携わられた仕事について紹介しました。

日時

令和5年1月21日（土）～2月19日（日）

展示品

茅葺き道具 茅葺きミニチュア模型
作業風景の写真パネルなど



展示風景

第126回 文化財めぐり～川崎地区の文化財をめぐる～

●津山東公民館—旧妹尾銀行林田支店（市指定重要文化財）—元禄道標—玉琳大塚古墳—日吉神社—六ッ塚古墳群（消滅）—狐塚遺跡（消滅・一部保存）—兼田丸山古墳—八幡神社—塞神社—津山東公民館（参加者15名）

令和4年12月10日（土）、津山市内川崎地区の文化財を中心にめぐりました。津山城下から東に出雲往来を進むと、鳥取方面に行く因幡道との分岐点があります。今回はその分岐点から因幡道を少し進み、再度出雲往来に戻ってくる周回コースです。因幡道との分岐点には、「是より左因幡道」と書かれた元禄道標があり、さらに多くの供養塔が所狭しと建てられていました。因幡道は丘陵を越える道のため、周囲には玉琳大塚古墳（前方後円墳）、六ッ塚古墳群（円墳）、狐塚遺跡、橋本塚古墳（円墳）、兼田丸山古墳（円墳？）などの遺跡があり、いずれも丘陵部に立地し、南側の平野部（加茂川方面）が望める場所です。また、日吉神社は因幡道、八幡神社、塞神社は出雲往来に面していて、地元のみならず、多くの旅人が、旅の安全などを祈願したことでしょう。当日は寒い一日でしたが、天気にも恵まれ約5kmの行程を無事に終了しました。



文化財めぐり風景

江戸一目図屏風レプリカを 東京スカイツリーから津山に移設しました

江戸一目図屏風は、津山藩のお抱え絵師であったくわがた けいさい 鋏形蕙斎（1764～1824）が、文化6年（1809）年に描いた江戸の鳥瞰図で県指定重要文化財となっています。

その構図が東京スカイツリーから見る景色と同じということで、オープン時からレプリカが展望台に展示されていました。このたび東京スカイツリー完成10周年の展示替えの中で、原寸大の「江戸一目図屏風レプリカ」については展示の役目を終えました。

年間を通して住民をはじめとした皆さまに江戸一目図屏風に親しんでいただくために、当該レプリカを津山市が譲り受け、市役所1階西側壁面（西側出入口付近）に移設展示しました。移設が無事完了し令和5年1月30日にはお披露目の式典を開催し一般に公開しました。



展示風景

考古資料この一点⑥

— 勝央町念仏塚出土の銅鐸 —

小郷利幸

はじめに

津山郷土博物館の弥生時代の展示コーナーに銅鐸を展示している(写真1)。岡山県内では20例以上の銅鐸の出土をみるもの(註1)、美作地方では本銅鐸が現存する唯一のもので、現在岡山県指定重要文化財である。これまでの研究で島根県雲南市加茂岩倉遺跡(註2)のものと同範関係もわかっており、最近の銅鐸研究を踏まえ今回紹介する。



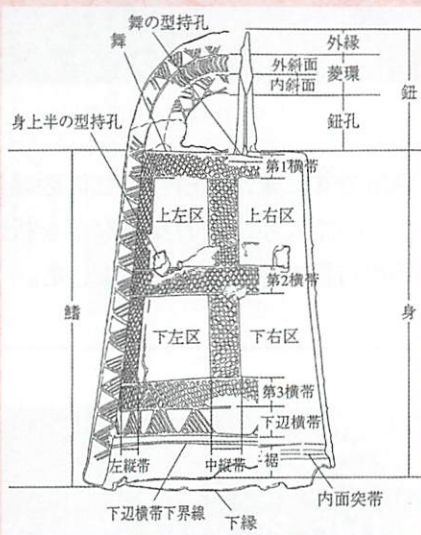
写真1 銅鐸

資料紹介(図2上)

本銅鐸の出土の経緯については、詳細な文献(註3)があり、昭和25年の3月か4月頃に現在の岡山県勝田郡勝央町植月北字念仏塚435番地の丘陵上の畑から発見された。畑を牛鋤している際に、黒土(クロ

ボク層)から出土し、内部も黒土が充満していた。その後放置されていたため児童が玩具として使用しており、同年には古物商を経由して、津山郷土館(当館の前身施設)収蔵となり現在に至っている。

なお、出土地は念仏塚遺跡と呼ばれ、確認調査で弥生時代後期初頭の竪穴式住居や土壌が検出され、弥生土器や石器が出土した(註4)。岡山県遺跡地図(註5)によると周辺にも同時代の遺跡が複数存在し、南側にはやや広い平野部があるが、そこからは少し奥まった立地となっている。

図1 銅鐸の名称
(註2より引用一部改変)

本銅鐸は、外縁付鈕1式に分類され、総高29・6cm、最大幅16・9cm、舞長径(A面)10・5cm、舞短径7・5cm、裾長径(A面)15・4cm、裾短径11・5cmを測る。

玩具として使用されていたため、外面の文様などは一部摩滅している箇所もあるが、保存状態は比較的良好である。

鈕の外縁にはA・B面とも内向する鋸歯文、内側菱環部分には外斜面に「X」状に対向する鋸歯文と内斜面に綾杉文が見られる。

鐸身はA・B面とも横帯と縦帯により四区に区画された袈裟襷文で、横・縦帯内は斜格子文で充填され、A面の第2横帯のみ2段になり下段に「X」状の対向する鋸歯文がめぐり、第3横帯は両面とも下段に鋸歯文が巡る。

鐸は付け根に沿って1条の線が施され、鈕の外縁から続く鋸歯文が施されているがやや小ぶりとなっている。この線で鈕と鐸が区別される。鐸の一部は欠損する。

鋳型で鋳造する際の型持の孔が、舞に1箇所、鐸身の両面上部に2箇所ずつ見られる。両面右裾部分にも型持の痕跡が僅かに見られる。范傷らしき痕跡が鈕や鐸身、鐸に見られる。

同範の銅鐸について(図2下)

先述したように同範の銅鐸は、島根県雲南市加茂岩倉遺跡36号鐸(註6)である。

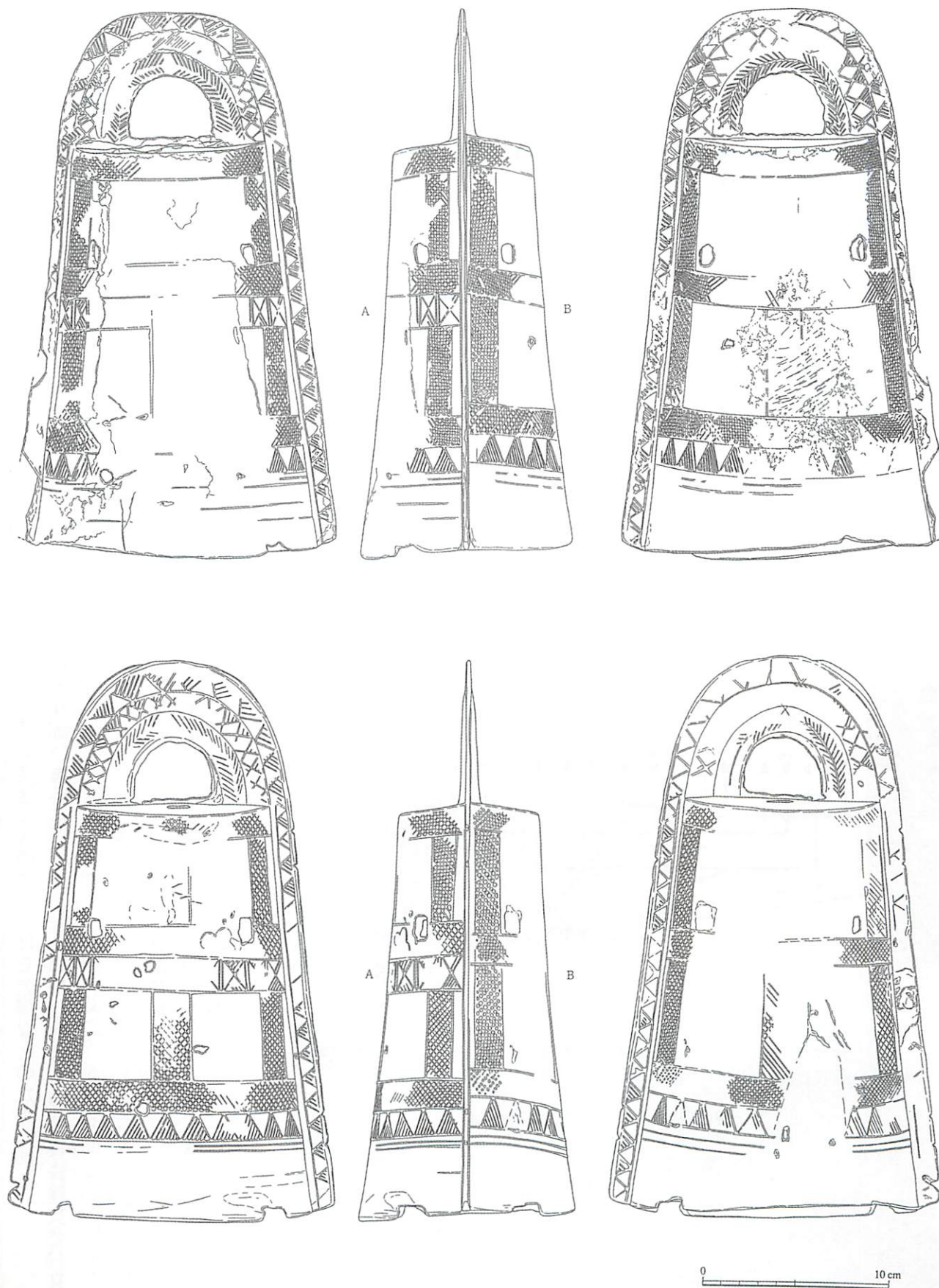


図2 銅鐸実測図（上：念仏塚、下：加茂岩倉遺跡36号鐸、S = 1 : 30、註2より引用）

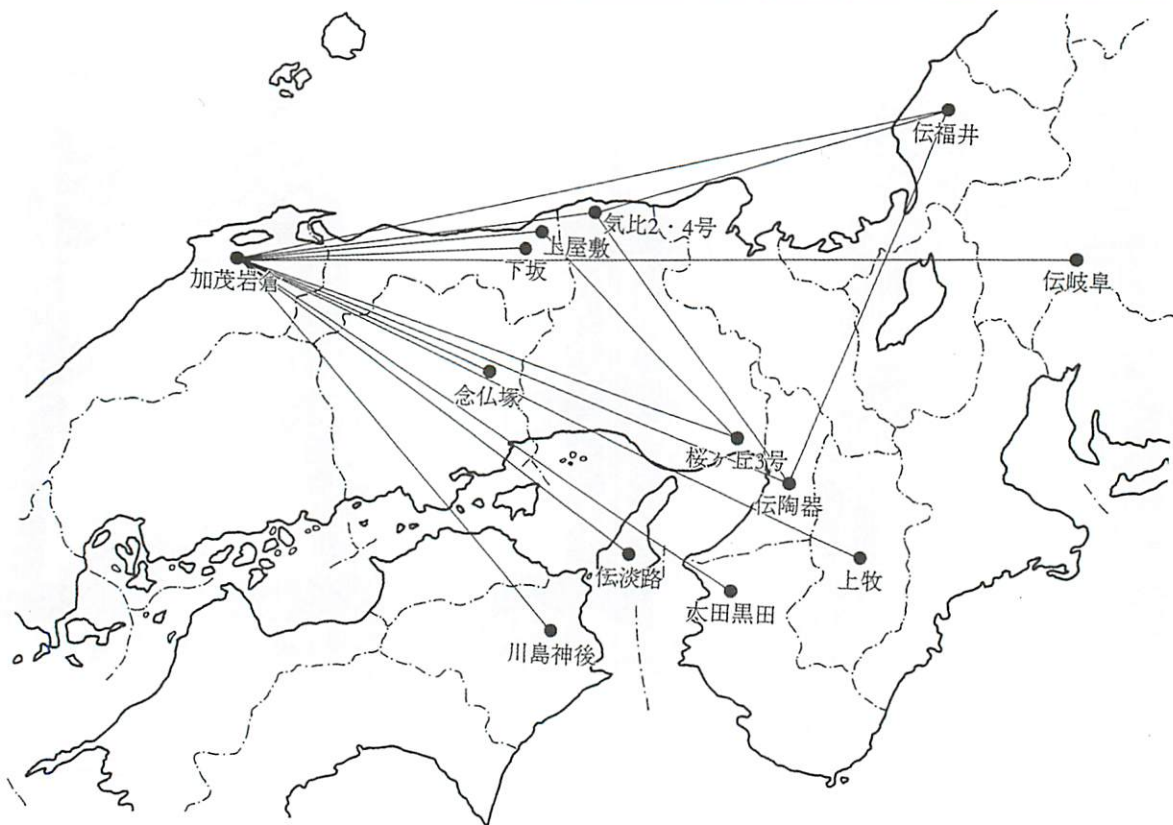


図3 加茂岩倉遺跡同範銅鐸の分布 (註2より引用)

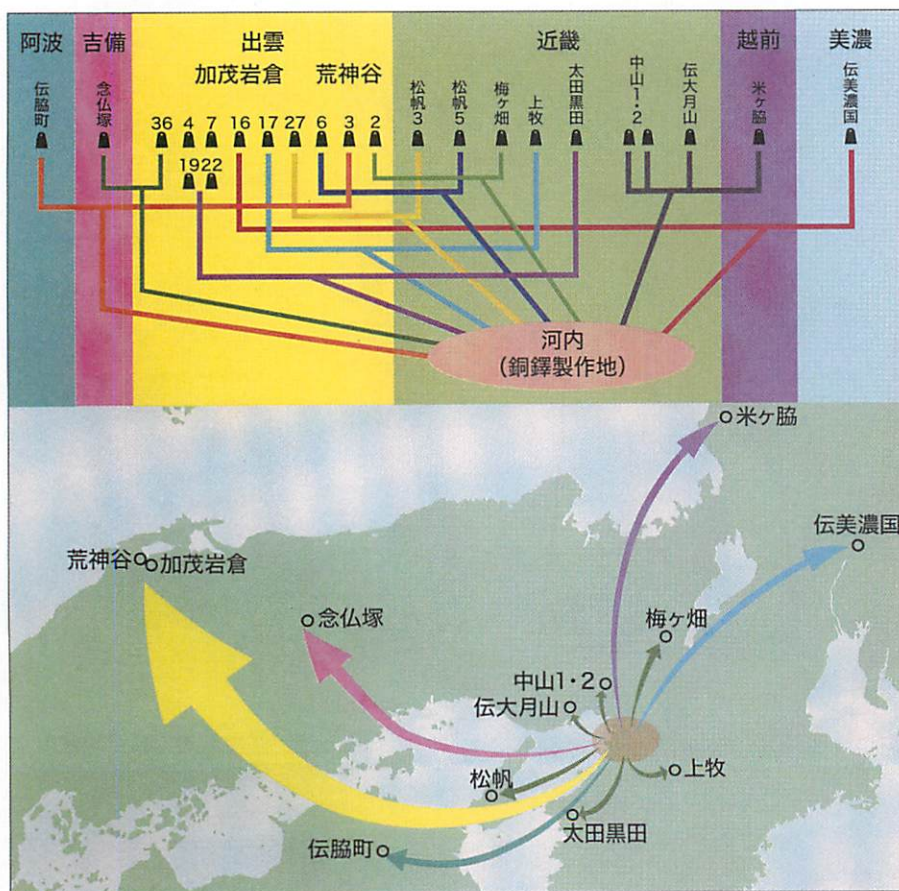


図4 外縁付鈕1式銅鐸の流通 (註9より引用)

総高30・3cm、最大幅17・8cm、舞長径(A面)10・4cm、舞短径7・5cm、裾長径(A面)15・5cm、裾短径11・8cmを測る。
 本銅鐸とほぼ変わらない大きさであるが、

総高が本銅鐸の方が低いのは、出土後にける欠損などのためである。
 鐸身は同様な四区袈裟襷文で、文様構成も同じだが、鈕のB面に「X」の刻印が施されている。この「X」の刻印は島根県出雲市荒神谷遺跡(註7)の銅剣に見られる特徴的なもので、工人の印しなのか、その関連が窺える。

なお、両者に範傷などもみられるが、両者の前後関係は明瞭ではない。

おわりに

本銅鐸と同範の銅鐸が出土した、加茂岩倉遺跡では39個の銅鐸が出土し、その内同範銅鐸が15組26個あり、その分布(図3)を見ると、本銅鐸のほか畿内周辺や鳥取、兵庫北部、徳島や福井、岐阜に及ぶことがわかる。さらに本銅鐸や同範の加茂岩倉遺跡36号鐸など、高さ30cm程の小形の外縁付鈕式の袈裟襷文銅鐸は、畿内に分布の中心があり、畿内地方で造られもたらされたと考えられており(註8)、さらにその流通を見ると(図4、註9)畿内から畿内周辺部や各地に及びながら、現状では出雲の加茂岩倉遺跡周辺のみ大量に運ばれたことがわかる。これにより出雲も畿内と同じ銅鐸祭祀圏という認識がより鮮明となり、吉備と出雲の中間に位置する美作地域にも出雲と同範の銅鐸がもたらされていることからすると、吉備と出雲との関係を考えながら、それらを結ぶ重要な地点として、本銅鐸のある美作地域が位置づけられていた可能性が十分考えられる。本銅鐸が出土した場所は、南側に比較的広い平野部を望む、やや奥まった丘陵上ではあるが、仮に銅鐸を畿内から運ぶとすると、畿内中心部から、海沿いを西に進み、播磨方面から山間部へ陸路をとることが可能で、これは古代より近

世にかけて整備された、いわゆる出雲往来があり、さらに進めば出雲地方にたどり着く。おそらく古代以前も同様な道筋があったものと推測される。また、瀬戸内海から吉井川を經由して吉野川など支流をさかのぼれば、たどり着くこともできる。その意味では、美作地域は水陸交通の要衝ともいえる。これらルートを使い、美作地域には古来より、畿内や出雲地方などから色々なものが運ばれ、交流があったことが、出土遺物から推測できる(註10)。

また、時代は違うが、本銅鐸の出土した隣接地には、美作で最大の前方後方墳、植月寺山古墳(全長90m、註11)など前方後方墳が多数造られた、美作でも特異な地域である(註12)。これは出雲地域に前方後方墳など、方形の古墳が多いことに関連しているのかもしれない。

それらを総合的に考えれば、銅鐸の出土一つをとっても、時代を通じて吉備と出雲の中間に位置する美作地域の重要性が、徐々に浮かび上がってくるようである。

註

(1) 岡本寛久2000「高塚遺跡フロア調査区検出の銅鐸埋納墳とその出土銅鐸について」『高塚遺跡・三手遺跡2』(岡山県埋蔵文化財調査報告150)に一覧があり、参考文献も詳しい。その後徳社市神明遺跡で1個出土した。

岡山県教育委員会2019「神明遺跡・刑部遺

跡」『岡山県埋蔵文化財調査報告249』

(2) 島根県教育委員会・加茂町教育委員会2002「加茂岩倉遺跡」

(3) 近藤義郎1951「美作国植月念仏塚出土の銅鐸」『吉備考古83』吉備考古學會

(4) 河本清1988「念仏塚遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告18』岡山県教育委員会

(5) 岡山県教育委員会2003「改訂岡山県遺跡地図第8分冊」

(6) 註2

(7) 島根県教育委員会1996「出雲神庭荒神谷遺跡」

(8) 佐原真2002「銅鐸の考古學」東京大学出版会

(9) 島根県立古代出雲歴史博物館2022「企画展 出雲と吉備」

(10) 例えば、山陰系の弥生土器やガラス管玉などは山陰から、流水文をもつ弥生土器は畿内からの影響を受けていると考えられる。

小郷利幸2021「考古資料の一点①有本遺跡のガラス管玉」『津博No.108』津山郷土博物館、同2022「考古資料の一点⑤長畝山北遺跡の流水文が描かれた鉢形土器」『津博No.114』津山郷土博物館など

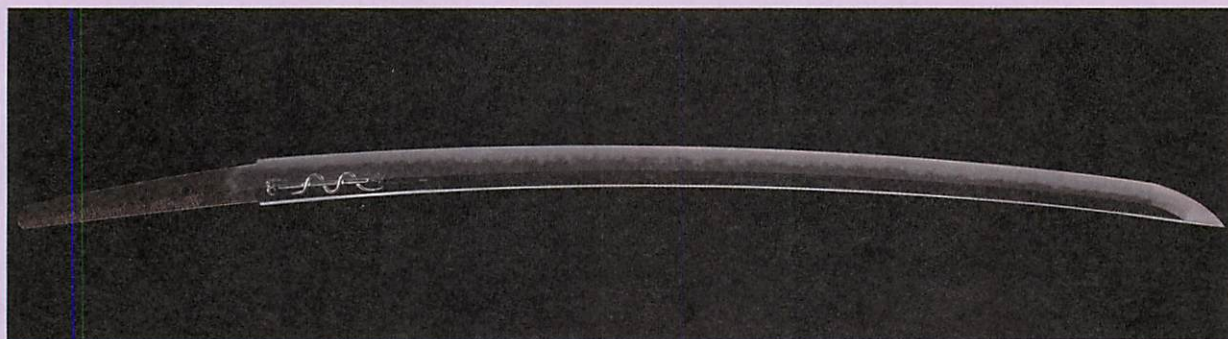
(11) 光永真一1986「植月寺山古墳」『岡山県史考古資料』

(12) 美野高塚古墳など、倉林眞砂斗・澤田秀美2000「美作の首長墳丘測量調査報告」吉備人出版

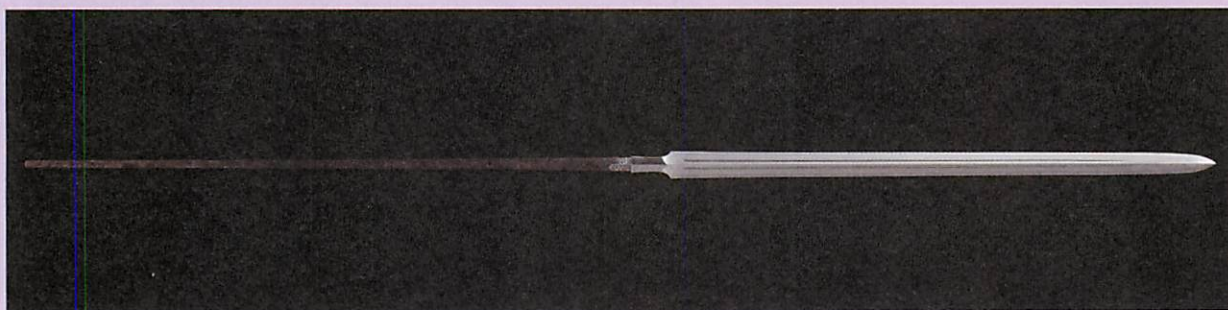
企画展「郷土の刀剣Ⅱ」開催

会期：2月25日（土）～3月26日（日） 場所：当館3階展示室

刀剣といえば備前長船が有名ですが、津山でも、江戸時代には津山藩が召し抱えた刀工がおり、津山や江戸の藩邸などで作刀が行われ、現在でも多くの作品が残されています。この展覧会では、昨年「郷土の刀剣—新刀から現代刀まで—」に引き続き、日本美術刀剣保存協会岡山県支部津山分会のご協力をいただき、江戸時代初期の刀工兼景の作品から現代の津山ゆかりの刀工の作品まで、郷土津山にゆかりの刀剣を展示いたします。



刀 兼景 館蔵



大身槍 多田金利 館蔵 【岡山県指定重要文化財】



博物館だより「つはく」
No.115 令和5年2月28日



【編集・発行】津山郷土博物館
〒708-0022 岡山県津山市山下92
Tel (0868) 22-4567
Fax (0868) 23-9874
E-mail tsu-haku@tv.t.ne.jp

【印刷】二葉

入館のご案内

【開館時間】午前9:00～午後5:00
【休館日】毎週月曜日・祝日の翌日
年末年始（12月29日～1月3日）・その他
【入館料】一般…300円
（30人以上の団体の場合240円）
高校・大学生…200円
（30人以上の団体の場合160円）
65歳以上…200円
（30人以上の団体の場合160円）

中学生以下・障害者手帳を提示された方は入館料が無料です

大は、津山松平藩の槍印で剣大といい、現在津山市の市章となっています。